

第1話 俺のクラスのエロいやツ

小5の丸の内ゴウタは自室の2段ベッドに寝転がって、スマホのアプリをタップした。
あまりまともなアプリじゃない。
裏サイト……いわゆるアングラサイトを見る専用のアプリだ。
表示されたのはエロ動画サイト。
それも、ゴウタと同じ年頃の少年達のエッチな動画が投稿されているサイトだ。
子どもは見ちゃダメどころか、大人が見てもダメな危険な動画がもりだくさんである。

ゴウタはこのサイトの常連だった。
彼はホモだ。
女子の裸よりも、男子の裸の方が興奮する。
大人よりも自分と同じ年頃の男子がいい。
そんな彼にとって、このサイトを見つけられたのはこれ以上ない喜びだった。
しかもこのサイトには……

(ケンタのヤツ、また新しい動画に出てる)

ゴウタのクラスメート、渋谷ケンタが出演するエロ動画が半月に1回くらいUPされている。
ケンタもまた、ゴウタと同じくホモだ。
いや、ケンタの変態っぷりはゴウタのそれよりも遙かにすごい。
セックスが大好きで、エッチなところを撮影してもらおうと何より興奮するという。
ゴウタのチンポを喜んでフェラしてくれたこともある。
そんなヤバいやつだから、ケンタは喜んで裏動画に出演しているらしい。
正直言って、ゴウタですらケンタにはついていけないと感じている。

それでも……

(やっぱり知ってるヤツのエロいところはいいよな)

ゴウタはケンタの新作動画のサムネイルをよく見てみた。
全裸のケンタが全身を荒縄で結ばれている。
亀甲縛りというやつだろうか。
さらに両腕を後ろに縛られていた。

(ついにSMかよ。よくやるよな、ケンタのヤツも)

そう思いながら、ゴウタは動画の再生ボタンを押した。

最初の場面ではケンタはちゃんと服を着ていた。

Tシャツと半ズボン。

今時こんな丈の短い半ズボンをはくヤツいないだろと思うようなジョギングパンツだ。

はっきりいって、ゴウタならこの半ズボンをはかされるだけでも恥ずかしい。

畳の床に座ったケンタのそばに、男が立っている。

男は荒縄をケンタに見せて言った。

『ケンタ、今日は縛るけど大丈夫』

『うん！ 縛られるのたのしみっ！』

『はははっ、縛られるのが楽しみだなんて、ケンタはエロいなあ』

『へへへ、僕エロい？』

『おう、ケンタはとってもエッチだぞぞ。じゃあ、こっちに足を伸ばして、右手はこうして……』

男に言われるまま、ケンタは手足を伸ばしたり曲げたりする。

男はそんなケンタを服ごと荒縄で縛り上げていった。

『痛くないか、ケンタ？』

『うんっ！ 大丈夫だよ。でも、痛くなくていいの？』

『どういう意味？』

『だって、これSM動画でしょ？ 至少くらい痛がった方が良いのかなって』

『ははは、ケンタは痛いのも好きなのか？』

『ちょっとくらいなら、痛いのも気持ちよさそう』

『ほんと、ケンタはかわいいなあ。じゃあ、いつかもっとハードなSMもやろうな』

そんなことを話しながら、男はケンタの全身を亀甲縛りして、さらに両手を後ろで縛った。

(あれ？ でもサムネイルでは裸だったよな？)

動画の中のケンタは服を着たまま縛られている。

サムネ詐欺かと思ったが、すぐに理由が分かった。

男がタンスから裁ちばさみを取り出したのだ。

『ケンタ、動くなよ』

男はケンタのシャツをジョキッと切り刻み始めた。

『わ、なにしてるの！？』

『ケンタの服を切ってる』

『えー』

『縛っちゃったから、普通には服もズボンも脱げないだろ？』

男はそう言って、ケンタのシャツを楽しそうにジョキジョキと切り刻んだ。
シャツがボロボロになって、ケンタのおへそやピンク色の乳首もあらわになった。
ハサミが乳首に当たって、ケンタが声を出した。

『きゃん。冷たいっ』

身をよじらせるケンタを男が注意した。

『動くなって。皮膚を切っちゃうぞ』

『うう、分かった』

男は亀甲縛りの隙間から器用にケンタのシャツを切り刻み、上半身裸にした。

『じゃ。つぎはこっちな』

今度はケンタの半ズボンを切り刻んでいく。

(エロいな、これ)

ゴウタは画面から目が離せない。

最初から全裸とか、服を普通に脱ぐよりも、こうやって切り刻まれていく方がずっとエッチに感じられた。

気がつくやうに、ゴウタは自分のペニスをズボンから取り出して、3本指を使ってオナニーを始めていた。

ケンタのシャツより面積が狭い半ズボンは、簡単にボロボロになってその役目を果たせなくなった。

残るはブリーフのみ。

『じゃ、ブリーフも切るからな』

『うん』

『動くとチンコ切っちゃうから気をつけろよ』

『ちんちん切られるのはヤダ』

『オナニーできなくなっちゃうもんな』

『うん』

『ケンタはオシッコよりオナニーが大切なのか』

『だってオシッコよりオナニーの方が気持ちいいもん！』

ケンタのブリーフは細切れになって、ケンタのおちんちんを隠せなくなった。

『勃起しているな、ケンタ。ちんちんカメラに映っちゃってるよ』

『えっへへ、みんな、僕の勃起おちんちん見てえ〜』

『縛られて勃起するなんて、ケンタはイケナイ子だ』

『えー、僕、イケナイ子？こんなにエッチなのにい？』

『おう、エッチなイケナイ子だ』

『社長はエッチないい子って言ってくれるよ』

『エッチで、いい子で、イケナイ子』

『どっちだよ？』

ケンタはちょっとだけほっぺたを膨らませて見せた。

『撮影中にそんな顔をするなよ。これは罰を与えないとなあ』

『罰？ 罰ってなあに？』

罰といわれたのに、ケンタはうれしそうだ。

エッチな罰が楽しみでしかたがないらしい。

『罰はこれだ』

男は自分のズボンとパンツを足下まで下ろした。

男の股間にはギンギンに勃起したどす黒い大人ペニスがそり立っていた。

(すげーチンコだな)

ゴウタはそのチンコに関心してしまう。

自分も小5としては大きい方だと思うが、本職の男優のペニスは桁違いだ。

一方、ケンタは男のペニスに目をキラキラさせる。

『おちんちんで罰？ フェラすれば良いの？ それとも……』

『フェラなんかで許すわけないだろう』

そう言って、男はケンタを抱きかかえた。

『もちろん、ケンタのここに俺のぶっといのを突っ込んでやるんだよ！』

男の宣言にケンタはむしろ大喜びだ。

『わーい、アナルセックスしてくれるんだ！』
『なんだ、そんなに喜んだら罰にならないじゃないか』
『だって、アナルセックス楽しみだもんっ』
『ケンタは本当にスケベだな！』

男はケンタを床に寝かせると、正常位でケンタのアナルに自分のペニスを当てた。

『あっ、ああん。入ってくるう、入ってくるううう♡』
『何がどこに入ってくるんだ？』
『お、オジサンのちんちんがっ、僕のお尻に入ってくるのお！』
『俺のチンコはどうだ？』
「あっ、ああん。ぶっとい！ めっちゃ太い！』
『痛いかな？』
『い、痛いけどお……でもきもちいいい！ あああん♡ 僕、僕、あああん♡』
『俺もケンタのお尻気持ちいいぞ』
『僕もっ！ 僕もオジサンのおちんちんきもちいいい♡ そこ♡ そこ♡ もっとお♡』

やがて、ケンタのおちんちんから精液が噴き出した。
それでも、男は容赦しない。

『ケンタ、お前が先に気持ちよくなってどうするんだ』
『ごめんなさい』
『おらあっ、俺もイクぞ！』

ケンタのアナルから男がペニスを抜く。
男はケンタの中で果てたらしい。
ケンタのアナルから、男の精液がポタポタとしたたれたシーンで、どうがは終わった。

(すげー、ケンタのヤツ、もうなんでもアリだな)

気がつくのと、ゴウタは自分の右手の中に射精していた。

(やっぱり、ケンタのやつエロすぎるぜ)

そんなことを考えていたゴウタを、部屋の外から現実に戻す声がした。

「ただいまぁ」

ゴウタは慌ててティッシュで汚れを拭いてズボンをはいた。

声の主はノックもなしに部屋に入ってきた。
当然と言えば当然、この部屋は彼とゴウタの部屋なのだから。
部屋に入ってきたのは丸の内ヒョウ。小2の弟である。

「なんだよ、友達んちに行ってたんじゃないのかよ？」
「うん、でももう17時だよ」

ゴウタとヒョウの母親が決めた門限だ。
ヒョウはいまでも律儀に守っている。

「そんなのどうでもいいのに」
「ダメだよお。ママに怒られちゃう」

ゴウタは小さくため息をついた。

「母ちゃんが家に戻ってきたらな」
「帰ってくるもん。ママも、パパも」
「……そうだといいけどな」

ゴウタとヒョウの両親が消えたのは1ヶ月前。
朝起きると、ゴウタのスマホに2通のメールが届いていた。
1通は母からの、もう1通は父からのものだった。

母からのメッセージは『新しい男ができた。だから家から出て行く。ゴウタとヒョウはお父さんと暮らさない』というものだった。

父からのメッセージもほとんど同じ内容。

要するに、それぞれ新しい恋人ができたから、ゴウタとヒョウと配偶者を捨てて家を出て行くという話だ。

しかも同日に。お互い子どもを押しつけあって！！

結果、家にはゴウタとヒョウだけが残された。

一応、父親が現金で2万円おいていってくれたので、今日までは兄弟2人で食ってこれた。だが、それも限界だ。

もちろん、ゴウタだって何度も両親にスマホで連絡を取ろうとした。
だが、着信拒否。
メールで事情を説明してみたが、それにも返事はなく。

(ようするにネグレクトってヤツだよな)

ゴウタとしては、もはや両親には怒りしか感じない。

今更家に帰ってきても入れてやるもんかくらいの気持ちすらある。

(だけど現実的には……)

父親が残してくれた現金はあと3000円くらい。

さっきまでケンタのエロ動画を見ていたのだって、半ば現実逃避である。

(金、どうにかしないとなあ)

と、そこまで考えたとき、ヒョウがゴウタに抱きついてきた。

「おにいちゃん」

「なんだよ？」

「おにいちゃんはいなくならないよね？」

甘えるような、それでいてちょっとだけ不安そうな弟の様子。

ゴウタはポンポンとヒョウの頭を叩いた。

「もちろんさ。俺はいなくなったりしないよ」

もし、現在のゴウタとヒョウの状況を学校の先生とかに話せば、児童養護施設とかに入られるのだろう。

そうなったらどうなるか。

弟と一緒にいられるのかすら分からない。

「えへへ、お兄ちゃんだ〜いすき」

ヒョウはそう言って、ゴウタに抱きつく力を強めた。

(お金、稼がなくちゃな)

普通なら無理だ。

中学生ならまだしも、小学生じゃバイトだってできないだろう。

だけど……ゴウタにはたった1つだけ、お金を稼ぐ当てがあった。

だから翌日の昼休み、ゴウタはケンタを校舎裏に呼び出したのだった。

第2話 お金のために!俺はショタ動画に出演する!

ゴウタに校舎裏に呼び出されたケンタは少しだけ警戒してる様子だった。

「こんなところに呼び出して……丸の内くん、なんの用？」

無理もない。自分が暮らすの乱暴者で通っていることくらい、ゴウタだって自覚している。

だからゴウタはケンタの警戒を解くべく、最初に下手に出ることにした。

ゴウタは頭を思いっきり下げていった。

「渋屋！ 頼みがある！」

ケンタは警戒を解いて、キョトンとした表情になった。

「なに？ またエッチなことしたいの？ いいよ！」

ケンタはニコッと笑って早速とばかりに、ズボンを脱ぎ出そうとした。

「ばっかっ、ちげーよ！」

「えー、僕のおちんちんが見たくなかったんじゃないの？ じゃあ、丸の内くんのおちんちんをフェラしてほしいとか？」

「そ、そうだな、たしかにフェラは気持ちよかった……って、だから違うっつーに！！」

あまりにも頭の中がピンク色なケンタにあきれつつ、ゴウタは言った。

「エロいことをしたいわけじゃねーよ。いや、ある意味したいんだけど……」

「どっちだよ？」

ゴウタは思い切って言った。

「金が欲しいんだ！」

するとケンタはちょっと身を引いた。

「えっと……カツアゲ？」

「それも違うわっ！」

正直、お金が必要だと感じてから、カツアゲとかスリとかも考えないではなかった。

なにしろ自分とヒョウの生活がかかっている。
だが、やはりそんなやり方では長続きしないだろう。
どこかで教師か警察かに捕まって、自分たち兄弟の生活はぐちゃぐちゃだ。

「じゃあ、どういうこと？」
「だから……たのむ！ 俺もお前みたいな動画に出演させてくれ！」

ゴウタがもう一度頭を下げると、ケンタがうれしそうにニコニコした。

「やっぱり丸の内くんもエッチなところを撮影してほしいんだね！」
「ちがうっ！ 俺はお前みたいに変態じゃねーよ！ ただ、金が必要なんだ。動画に出れば出演料もらえるんだよな！」
「あー、そういうことかぁ。お金ならもらえるよ。社長と話さないとはっきりとは約束できないけど、1本1万円くらいかなあ」

動画1本で1万円。10本出演すれば10万円だ。
少なくとも急場はしのげるし、もしかするとヒョウと2人で暮らしていけるかもしれない。

「俺も出演できるのか？」
「うーん、それも社長と話さないとわかんない。とりあえず、学校終わったら社長に聞いてみるよ。結果はメールするね。メアド教えてくれる？」
「ああ」

その後、ゴウタはケンタと連絡先を交換した。
そして放課後。
家でヒョウと一緒にテレビを見ていたゴウタの元へ、ケンタからメールが届いた。

『社長に聞いたら、面接OKだって。明日か明後日か、都合のいい時間教えて。面接会場までの交通費が500円くらいかかるけど大丈夫？』

明日は土曜日だ。特に予定もない。500円くらいならお金も問題なかった。

『分かった、明日で頼む。時間は10時でどうだ』
『了解♪ そしたら、日売駅の南口に9時集合で』
『OK』

こうして、ゴウタのショタ動画出演に向けた面接日が決まった。

翌朝。

ゴウタはヒョウと朝食を終えた。

たいした食事じゃない。

ご飯と納豆ともやし炒めだ。

これでも、1ヶ月で炒め物くらいは作れるようになったのだ。

「ヒョウ、今日、兄ちゃん出かけるから。帰り時間は分からないけど、ちゃんと戸締まりをして待ってるよ」

ゴウタがそう言うと、ヒョウは真っ青になった。

「ヤダ、お兄ちゃん、行っちゃヤダ」

「え、いや、そうはいうけど、用事があって……」

さすがにショタ動画に出演するための面接に行くとは言えず、微妙に口ごもってしまった。

すると、ヒョウがゴウタにしがみつくように抱きついた。

「お兄ちゃん、いなくならないで」

そういつて、ヒョウはグズグズと泣き出してしまった。

「俺は別にいなくなったりは……」

そこまで言って気がつく。

弟は不安なのだ。

突然両親がいなくなり、今度はゴウタまでいなくなってしまうのではないかと。

「ヒョウ、大丈夫だから。俺は今日中に帰ってくるから」

「ヤだもん。お兄ちゃんが行くなら僕もいくもんっ！」

「えええ……」

ゴウタはチラリと時計を見た。

待ち合わせの時間まであと10分ほど。

遅れるわけには行かない。

ケンタを待たせるだけならまだしも、面接をしてくれるという社長さんを待たせたらそれだけで不採用になりかねないだろう。

「なあ、ヒョウ、兄ちゃんはいなくなったりしないから、今日だけは家で待っててくれよ」

「やだぁ、お兄ちゃん、いかないでええ」

ヒョウはわんわん泣き出してしまった。

(まいったなあ)

時間は少しずつ過ぎていく。

「ああ、もう。分かったよ。一緒に行こう、な、ヒョウ」

「うんっ」

ヒョウはパアッと明るい笑顔になったのだった。

日売橋駅への道すがら、ゴウタは「はぁ」とため息をついた。

ゴウタは右手でヒョウの左手を握っている。

(どこに弟同伴で就職面接をうけるやつがいるんだよ)

まして、エロ動画に出演するための面接だ。

小2の弟を連れて行く場所じゃない。

こんな非常識なこととして、採用されるのだろうか。

日売橋駅前に行くと、ケンタが待っていた。

「ゴウタ！ こっちこっち」

「待たせたな、渋屋。……っていうか、ゴウタって」

学校ではお互い名字で呼び合っていたはずだが。

「これから一緒に頑張る仲間じゃん。ゴウタも僕のことはケンタって呼んで」

「あ、ああ、分かった。ケンタ」

改めて名前で呼び合うと、少し気恥ずかしい。

ケンタがヒョウを見て言った。

「ところで、その子は？」

「えっと、俺の弟のヒョウ。やっぱり連れてきちゃマズかったか？」

「別に大丈夫だと思うよ。何年生？」

「2年生だよ」

「そっか。事務所には3年生の子もいるし、仲良くなれる……かなあ？」

「なんでそこで疑問形なんだよ」

「いや、アイツ性悪だから、むしろ仲良くならない方が良いかもとか……」

「何の話だよ」

「ま、いいや。とりあえず電車来ちゃうから乗ろう。乗り遅れたら遅刻しちゃう」

こうして、ゴウタとヒョウはケンタに案内され電車に乗って一路『SHO-TAROプロダクション』に向かった。

『SHO-TAROプロダクション』の入居している雑貨ビルの前で、ケンタは言った。

「ここの3階だよ。ちょっと薄暗いビルだけど、怪しい場所じゃないから心配しないで」

ショタ動画を撮影している事務所は十分怪しい場所じゃないのかという疑問が頭に浮かぶが、口に出すのはやめておいた。

ヒョウがゴウタの手をギュッと握って不安そうにたずねた。

「お兄ちゃん、ここで何をするの？」

さて、どう説明したモノだろうか。ここまで目的地については何も告げずに来てしまったのだが。

(ある程度は正直に言うしかないか)

「就職面接だよ」

「シューショクメンセツ？」

どうやら言葉の意味が分かってないらしい。

「ここで、兄ちゃん仕事させてもらうんだよ」

「……やっぱり、お金足りないの？」

「ヒョウは心配するな。兄ちゃんがなんとかするから」

「うん」

「だから、ヒョウはおとなしくしているんだぞ」

「わかった」

兄弟で話がつくと、ケンタが言った。

「もういい、ゴウタ？」

「おう、悪かったな。いま行くよ」

ケンタに続いて、ゴウタ達も3階へ。

くもりガラスの扉に『SHORTAROプロダクション』と書かれたパネルが貼り付けられていた。

ケンタは扉をトントンと叩いた。

すると、扉の向こうから「どうぞ」という声が聞こえてきた。

男の声……というよりはボーイソプラノといった感じの声だった。

実際、ケンタが扉を開けると、椅子に座っていたのはゴウタよりも年下の少年だった。

少年はゴウタ達3人を見て言った。

「なんだ、ケンタか。そいつらが面接したいってヤツ？　ってか、面接希望は1人じゃなかった？　情報は正確にしろよ。ハウレンソウは仕事の基本だろ」

矢継ぎ早に言ってくる少年。

「なあ、ケンタ。まさかアイツが社長じゃないよな？」

「まさか。彼は永納ライトくん。動画で見たことない？」

ケンタに言われ、ゴウタは思い返す。

「あ、そういえば……」

ケンタと同じく、例のアングラサイトのエロ動画で見た顔だった。

確か、小3だったはず。

なるほど、この事務所にはケンタ以外の出演者もいるわけだ。

などと思っていると、ライトが椅子から飛び降りるようにしてこっちにやってきた。

「あのさあ、そっちのチビはまだしも、アンタはケンタと同年なんだろう？　最低限の礼儀って知らないの？」

「礼儀？」

明らかに年下の少年にアンタ呼ばわりされて、ゴウタも少し腹が立った。

「そ、礼儀。オイラはアンタの先輩なわけ。仕事をもらいに来たなら、まずは『よろしくお願いします』とか『名前を名乗る』とかあるだろ？」

たしかに正論だ。
正論かもしれないが……

「おい、ケンタ、このガキさあ」

どう見てもライトはゴウタよりも年下だ。
たしかにこの場ではライトの方が先輩かもしれないが、礼儀知らずはどっちだと言いたくなる。
ケンタは『あっちゃあ』という顔で頭を抱えた。

「ライト、そんなことより永納社長は？」
「ああ、さっき買い出しに出かけた。もうすぐ帰ってくるだよ」
「えええ、面接時間もうすぐだよ」
「昨日いきなり面接申し込んで、今朝会ってもらえるだけでもありがたく思えよ」
「ま、そうかもね。ああ、彼らは丸の内ゴウタと弟の丸の内ヒョウくん。ゴウタは僕の同級生で、ヒョウくんは2年生」
「ふーん、5年生と2年生の兄弟ね。いいんじゃない？ 兄弟愛モノとかPV稼げるぞ」

ライトはそう言って、ケラケラ笑った。
ゴウタは慌ててしまう。

「ちょっと待てよ、今日面接するのは俺だけだ。ヒョウは関係ない！」

ヒョウをショタ動画に出演させるなど冗談ではなかった。
するとケンタが驚き顔になった。

「え、そうなの？」
「そうだよ！ って、お前もヒョウをショタ動画に出演させるつもりだったのか？」
「うん、だって、そうじゃなきゃ一緒に来るわけないと思ったし……」
「ふざけんな。ヒョウはまだ2年生だぞ」

するとライトが「へんっ」と笑った。

「オイラは1年生になるまえから動画に出てたぜ？ この世界、歳が低ければ低いほど貴重だからな」
「そうかもしれねーけど！ とにかく、ヒョウは関係ないからっ！」

ライトはヒョウにたずねた。

「ふーん、じゃあ、チビ。なんでお前ここについてきたんだ？」

「だ、だって、お兄ちゃんが1人で行っちゃうから……」

涙目で答えたヒョウを、ライトがあざ笑った。

「はっはっ。なんだ、このガキ、ブラコンかよ？　ますます兄弟愛モノの動画作りやすそうだな」

と、ここでゴウタも気づいた。

「なあ、ケンタ。駅でお前が話していた性悪3年生って……」

ケンタはため息交じりに『その通り』とばかりにうなずいた。

その時、扉が再び開き、ビニール袋を持った男性が入ってきた。

第3話 俺がチンコをさらした日

部屋に入ってきた男性はゴウタたちを一瞥していった。

「キミが丸の内ゴウタくん？」

「ああ、そうだけど」

「俺がこの『SHORTAROプロダクション』の社長、永納孝次だよ。よろしくね」

永納社長が差し出した手を、ゴウタは握り返した。

「よろしくおねがいします」

「うんうん、元気がよくてよろしい。ところで、そっちのボクは？」

「弟のヒョウ。どうしてもついて来ちゃって。すみません」

「ふーん、ヒョウくんか。かわいいね。キミの動画もウケがよさそうだな」

「弟は関係ない。仕事するのは俺だけだから」

ゴウタがそういうと、永納社長は『ふーん』とちょっと考えるような仕草をした。

「そう？ ヒョウくんなら普通よりもたくさん出演料をあげられるよ」

「どういう意味ですか？」

「そのまんまの意味だよ。ヒョウくんみたいに小さな子は珍しいからね。普通よりもたくさん出せるんだけど、どう？」

『どう？』といわれてもゴウタの答えは決まっている。

「弟はショタ動画になんか出しません！ 出るのは俺だけだ」

「ふーん、そうか。じゃあしょうがないね。早速面接しようか」

面接会場は隣の部屋だという。ゴウタ1人ついてくるようにと言われた。

「ヒョウ。良い子でここで待っているんだぞ」

「うん。ボク待ってる。お兄ちゃん頑張って」

「ケンタ、ヒョウのこと頼む」

「まかせといて」

ゴウタはケンタにヒョウを預け、面接会場の部屋へと向かった。

面接会場の中央にはパイプ椅子が置いてあり、その椅子を囲むようにビデオカメラがいくつも設置されていた。

永納社長がビデオカメラを弄っていた。

「撮影するのか？」

「うん、面接の様子は毎回ね。さ、中央の椅子に座って」

ゴウタは言われるがまま椅子に座った。

ビデオカメラのレンズに囲まれるのはちょっと居心地が悪かった。

「まずは自己紹介してくれるかな？ 氏名と学年くらいでいいから」

「丸の内ゴウタ、小5。学校名も言う？」

「それはいいよ。じゃあ、好きな教科と嫌いな教科を聞いてもいい？」

「好きなのは理科かな。嫌いなのは算数」

「ふーん、どっちも理系科目なのに珍しいね」

「実験は好きだけど、計算は苦手なんだよ」

「なるほど、なるほど」

永納社長はうなずいて見せてから、本題に入った。

「ところで、ゴウタくん。このお仕事がどういう内容かはわかっている？」

「ああ」

「言ってみて」

「……エロいことするのを撮影してネットで見てもらう」

「その通り。もしお仕事をするなら、ゴウタくんのおちんちんもお尻も全部見られちゃうよ。大丈夫かな？」

ゴウタはグッとつまった。

本当にショタ動画に出演するんだと思うと緊張もするし、躊躇する気持ちもまだある。
だが。

(他に方法はない)

ゴウタはツバをゴクリと飲み込んでいった。

「大丈夫に決まってるだろ！ 覚悟はできてる！」

「単に裸をさらすだけじゃないよ。エッチなことをたくさんしてもらう。本当にできる？」

「ああ」

「なら、その覚悟をみせてもらおうか。その場で裸になってくれ」

「……分かった」

正直、ゴウタはこの展開を予想していた。

例のアングラサイトには『新人面接オナニー』というシリーズ動画がUPされており、

ケンタも面接時に全裸でオナニーしていたのだ。

(いよいよ、俺もショタ動画デビューか)

Sun__Taiのアカウント紹介

○Sun__Taiのファンティア

<https://fantia.jp/fanclubs/62051>



○Sun__TaiのCi-en

<https://ci-en.dlsite.com/creator/19343>



※ファンティアとCi-enで読める内容はほぼ同じです。

作者的にはファンティアは表現規制がやや強めなので、Ci-enの方がオススメです。